

# トンドウプジャとインド的伝統

——チベット現代文学の誕生をめぐる——

大川 謙作



## はじめに

我が国ではこれまで、チベット文学という場合、主としてチベット人たちによって漢語で書かれたチベット文学のことがイメージされてきた。中国においても事情は同様である。こうした漢語チベット文学は今日、それなりの成功を収めているといつてよく、一部の作家とその作品は、単に中国少数民族文学という枠組みにおいて中国文学の下位分野を形成しているのみならず、そうした枠組みを超えた、あるいはそうした枠組みをゆるがすような創発的な文学としても評価されている。<sup>(1)</sup>

こうした漢語チベット文学の成功にともない、また我が

国の中国文学研究の長い伝統もあって、我が国でもそうした漢語チベット文学の翻訳紹介と研究は進んでおり、一定の存在感を持っているといつてよい。例えば漢語チベット文学の旗手であるタシ・ダワ（我が国では漢語発音にもとづいてザシダワと表記されることが多い）、さらには現在もつとも精神的に活動している漢語チベット文学作家であるアライイなどの作品は日本語に訳され、単行本のかたちで我が国の読者に届けられており、またその文学的意義を論じた良質の解説や研究も存在する。<sup>(2)</sup> 他方で、チベット語で書かれた現代文学も存在しており、当然ながらそれらもまたチベット文学と呼ばれる。

だがこうしたチベット語チベット文学は、漢語に比べて圧倒的に読者人口やプレゼンスで劣るチベット語という言葉

語で書かれているが故に仕方のないことではあるが、中国や日本における存在感は乏しかった。ではあるけれども、チベット人にとってみればチベット文学といった時にまず意識するのはやはりチベット語の文学であり、また欧米ではこうしたチベット語文学の紹介がそれなりに進んでおり、チベット語文学は一つの確立したジャンルとして一定の存在感がある。ここで翻って中国国内の事情を見ると、政治的理由から中国ではチベット学は国家重点領域となっており、重要チベット語古典文献の漢語への組織的翻訳は盛んではあるのだが、現代文学についてはある種の盲点となっているのか、翻訳もまだ多くはない。<sup>4</sup>近年、自らも作家であるチベット知識人たちが、盟友であるチベット語作家たちの作品を精力的に漢語に翻訳しており、こうした状況は改善されつつあるとはいえ、チベット語文学は中国国内の文学者たちにはまだまだ知られていないとはいえないだろう。ところが、見逃されがちなことであるが、中国国内においてすら、実際にはチベット人の書く文学としてはチベット語文学の方が漢語文学を量的に圧倒しているという事実もある。一九八一年から約二十年の間にチベット語の代表的な文芸誌『ダンチャル』に掲載されたチベット語文学は約五千点にもぼるのに対して、漢語のチベット文芸誌はしばしば原稿の不足を嘆いている [Maconi 2008: 177-178]。すなわち、チベット語チベット文学は「小さいなが

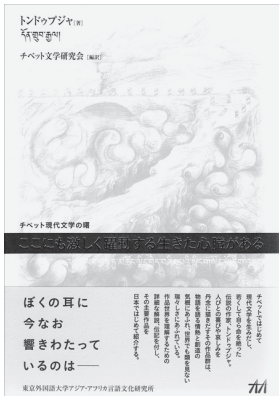
らも」存在感があるのではなく、そもそも文学としての規模において漢語チベット文学を凌駕しているのである。こうしてみるとチベット語文学を漢語チベット文学に比してマイナーな分野であると思えずことそのものが一種の臆見であると言えよう。にも拘わらず、我が国においては筆者もそのメンバーであるチベット文学研究会が二〇〇八年に短編小説の邦訳を雑誌に掲載し、二〇一二年に単行本のかたちで翻訳を出版するまでは、チベット語の現代文学が翻訳紹介されることはなかったし、今日の時点（二〇一五年）において、チベット語の現代文学の邦訳はすべて我々チベット文学研究会およびそのメンバーの手によって翻訳されたものしか存在しないというのが現状である。<sup>5</sup>漢語とチベット語の間には圧倒的な読者人口の差があることを考えれば、こうした事情はかなりの程度まで仕方のないことであるが、それでも我が国におけるチベット文学の紹介は漢語チベット文学のそれにかたよってきたといえるであろう。「たった一つの言語を用いて近代文学を創りえたケースの方がまれ」であるという大東の指摘 [大東 2013: 232] はチベットにおいても妥当であり、チベット語と漢語の少なくとも二つの言語によるチベット文学が存在する。そのためチベット現代文学について考えるとき、この両者の関係について考えるという作業がどこかで必要となってくる。そしてその課題はまだ果たされていない。筆

者の能力の限界もあってごくごく初歩的なものに留まらざるを得ないかもしれないが、本稿はそのような試みである。

筆者にはこれまで、チベット語文学の翻訳紹介に加え、その意義についても何度か論じる機会があった〔大川2008、2010、2012〕。それらの論考において筆者は、チベット語による現代文学の父と目されているトンドゥプジャ (don grub rgyal) の作品や創作活動についての概要を示し、また不十分なながらもその後のチベット語文学の展開についても述べてきた。本稿においては、とりわけ歴史的経緯の説明としては如上の論考とも重複した記述も行うが、これまでの論考においては十分に論じられていなかったトンドゥプジャにおけるインド的伝統の問題について特に焦点



死後に出版された  
トンドゥプジャの著作集



トンドゥプジャ『ここにも激しく躍動する生きた心臓がある——チベット現代文学の曙』(チベット文学研究会編訳、勉誠出版、2012年)

をあて、一九八〇年代におけるチベット現代文学の誕生という問題について、より広いチベット思想史という文脈から考察する手がかりとしたい。この作業を通じてチベット語の現代文学が負っていたところのチベット思想史からの連続性という歴史的コンテクストについて再考したい。

あるいは、「インド的伝統」なる表現にある種の意外さを感じる読者もあるかもしれない。しかし、チベットにおける仏教の影響力の甚大さに典型的に現れているとおり、チベットの思想史を長らく支配してきたのはインド思想であり、実は文学という領域においても事情は同様であった。このようなチベットにおけるインド的伝統の桎梏については、以下のトンドゥプジャの発言を見よ。

ぼくたち（チベットの）学者にはある欠点があつて、それは歴史と文化の起源を可能な限りインドに求めようとすることだ。たしかに一般的には、インドとチベットの間にはすべての側面で確固とした関係がある。だけれども、ぼくたちが持つすべてをインド起源だと考えることは、チベット人にも自らの歴史、自らの文化、自らに固有の特質、自らの思想、自らの慣習が存在することを否定することではないか。解放後三〇年あまりも経つというのに、このような観点を否定できずにいるということ。は、ぼくたち若い世代が恥とするところであるだけではなく、ぼくたち民族の恥でもある。（中略）サンジェ氏よ、ぼくの思うところ、ダンデンが『詩鏡』を書くことができたのだから、ぼくたちが『チベットの詩鏡』を書くことができないなどということがあろうか？ [don grub rgyal 1997a: 160-161]

作家の嘆きは、インド的伝統からの知的独立を果たせないでいるチベット文化についての痛切な問題提起である。ここで興味深いことは、チベット文化の自立性という、チベットの知識人にとって避けえない課題について苦悩する作家が、しかし問題として意識しているのはあくまでもチベットとインド思想との関係であり、チベットと中国思想の関係についてはない、ということであろう。このよう

に、一九八〇年代においてすらも、インド思想の桎梏はチベットにとつての大きな問題として存在し続けており、文学こそがこのような思想的対決の果たされるべきフィールドとして存在していた。この点において、チベット文学における言語の違いは決定的に重要である。というのは、このチベットにおけるインド的伝統こそは漢語チベット文学に存在しないチベット語文学独自の問題であるからであり、漢語チベット作家たちがもつとも理解していない領域であると思われるからだ。本稿では、まずチベット文学における言語の問題について考察するところから論を始め、ついでチベット文学におけるインド的伝統の問題について考えていきたい。

## 一 言語の問題

如上のとおり、漢語チベット文学は今日、中国の少数民族文学という枠を超えた成功をおさめており、これはそれ自体としては喜ぶべきことである。しかし他方このことは、一部にある種の誤解を生むものにもなっているかのようにも思える。それは、そもそもチベット語では文学することなどできず、チベット語による現代文学など存在しないか、存在してもそれはごくごく素朴な中国文学のなぞりにすぎないのではないかというような誤解であり、それ以

前のチベットには文学といってもせいぜい口承の民間文学のようなものしか存在しないのではないかとといった素朴な理解が少なからず存在する。また興味深いことに、他ならぬチベットの知識人をも含めたチベット語を解する知識人の間にも、仏教文献や歴史文献などの高度に抽象的で形式的な文献の存在に興味を持つてはいても、文学といったジャンルのある種卑近なものとしてとらえて過小評価するという傾向も存在した。つまり、チベットの伝統文化に詳しくない人間と詳しい人間の双方にとつて、チベット語の現代文学が一種の盲点となつていような状況が存在したのである。だがこうした観点はともに誤解である。一九八〇年代以降チベット語による現代文学の創作は増加の一途をたどつており〔Harley 2002〕、この事実が証明するようにチベット語で文学することは完全に可能である。それどころか、所謂ネット作家やケータイ小説も登場し、文学論壇ウェブサイトで様々な議論が交わされるなど、チベット語の文学もまた現代的な趨勢に合わせた発展を遂げているのである。

さてチベット文学における言語の問題は非常に敏感な問題であり、一九八〇年代に争われた「チベット文学論争」におけるほぼ唯一の論点が言語の問題であった。この論争は一九八六年にチベット自治区の首府ラサで開催されたラサ・チベット学討論会の席上において提起されたものであ

る。当時チベット社会科学学院に在籍していた文学研究者のソナムはチベット人作家がチベット語でチベットを舞台にして描いた作品のみがチベット文学の名に値するという主張を行い、これに対して当時の代表的な漢語チベット作家たちが漢語チベット文学を擁護した。ソナムらの主張は明快だが直裁的なものであり、ある意味で民族主義的色彩を帯びているとすらいえる。こうした自由な意見の表明が許されたこと自体が、一九八〇年代チベットの開放的な雰囲気を反映しているといつてよい。今日であれば、チベット語で書かれた文学のみをチベット文学と呼ぶべきだとする主張は民族主義的主張として批判されてしまうであろうし、そもそもそうした主張を発表すること自体が困難になつている。ただしこうした困難な時代にあつてもなおチベット語による文学は続々と生産されつづけており、また近年は映画監督としても高名なペマ・ツェテンのように、チベット語と漢語の双方で作品を発表するバイリンガル作家も登場している。チベット文学の将来にとつて、このように二つの言語のチベット文学を持つことのある程度まで肯定的にとらえていく必要はますます高まっていくと思われる。というのも、漢語チベット文学作家やその作品に通じるものたちがチベット語文学の存在に対して冷淡であるのと同様、この論争からも見てとれるとおり、チベット語作家たちが漢語作家に対して否定的であることが少な

くないからである。漢語チベット文学には「身内のチベット族からの反発が多い」〔牧田 1991: 241〕という指摘は正鵠を射たものであろう。

ところで、この論争が闘われていたのと同じ一九八六年、上海で開催された中国現代文学シンポジウムの席上で、漢語チベット文学の旗手タシ・ダワは、チベット文学の誕生についてきわめて興味深い発言を行っていた。タシ・ダワの作品の邦訳者でもあり、中国少数民族作家たちによる漢語文学を精力的に我が国に紹介して来た牧田英二は、同シンポジウムの席上におけるタシ・ダワの以下のような主張を紹介している。牧田の要約によれば、タシ・ダワがチベット文学を新しく形成しようとしたとき、それに対立すべき旧文学が存在せず、チベットの伝統文化も彼らにとっては空白でしかなく、漢族の小説しか対立物がなかったと認識していたという。それゆえ、タシ・ダワは、新しいチベット語文学が漢族文学のまねびとなることを避けるため、漢族文学との断絶を図り、ラテン・アメリカ文学に新しいチベット文学形成の可能性を見いだした、という〔牧田 1991: 246-247〕。こうした主張は、単なる中国文学の一部ではないものとしてのチベット文学を構想したタシ・ダワの文学的構えが持つ視線の高さや周到さを示すものであり、きわめて興味深い。ではあるが、このような語りはタシ・ダワのチベットの伝統への無知を示すものと

なってしまうている。なぜなら、後述するとおり、チベットには高踏的ではあるが洗練をきわめた伝統文学の歴史が存在し、「チベットには旧文学が存在しない」との認識はまったくの事実誤認であるからだ。また何よりも、この発言から、タシ・ダワがチベット語によるチベット文学の存在にはまったく注意を払っていないことが理解できよう。これは一九八六年の発言であるが、当時はすでにチベット語文学の創始者であるトンドウブジャの文学的成果がチベット人たちに広く知られていた時代であり、よしんば本人がチベット語を解さなくてもせよ耿予芳による漢語訳を参照することができたはずでもあり、この無関心さはいささか異様なものであるように思われる。だが大切なことは、タシ・ダワの無関心さや無知をあげつらうことではなく、むしろここからチベット語作家と漢語作家とが、ともに一九七〇年代末から一九八〇年代にかけて自らのチベット新文学を形成しようとした同じ時期に、まったく異なった思想的文脈のもとにあつたことを理解することである。従って、次なる課題は、タシ・ダワが「無伝統」と見なしている現代文学登場以前のチベット伝統文学の状況を概観することである。



## 二 現代文学登場前夜まで

一九五三年の生まれのトンドゥブジャが現代文学の創始者であるということからわかるとおり、チベット語チベット現代文学の歴史はまだまだ浅いとも言える。彼が創作活動を開始したのは一九七〇年代末、まさに文化大革命終了の直後である。トンドゥブジャは最初のチベット語自由詩を書き、農民や牧民などの庶民生活、とりわけ中国という新体制下のチベット社会を写実的に描いた小説をチベット語で書いたほぼ最初の作家であった。<sup>10</sup>たとえば高名なチベット学者スタンは、一九六二年に出版されたチベット文化について網羅した定評ある大著において以下のように述べている。

一一世紀および一二世紀に（チベットの）仏教化が行われて以来、厳密な意味では、もはや（チベットの文学には）新たな発展改革がなかったと言わねばならない。この時期からのちは、仏教化の影響にもかかわらず依然として土着の伝統に近くとどまった文学形式と、インドの影響を受けた、学者的な、銜学的な文学形式とが相並んで存在した。〔スタン 1993: 343〕

ここでスタンは、チベットにおいて文学の名に値するものとして、民間の口承文芸と伝統文学の二つのみを挙げている。これは原著の出版時期が一九六〇年代であることを考えばまずは妥当な意見といえる。実際には新中国のチベット進出直後の一九五〇年代においてすでに、共産党の主導にチベットの伝統知識人が協力するかたちで、チベット語による文学創作に向けた動きはわずかながらに存在したとはいえ、そのような動きが大きな流れとなることはなく、実質的な意味でのチベット現代文学の誕生は文化大革命の終焉を待たねばならなかった。本節ではこうしたチベット現代文学登場前夜までのチベット文学について概観してみよう。

チベット文学史において、俗人によって書かれた物語性に富んだ小説作品としてしばしば言及されるのは、一八世紀の政治家であり『ポラネー伝』などの歴史書の著者としても知られるラサ貴族ドンカルワ・ツェリン・ワンギェー (ndo mkhar ba tshe ring dhang rgyal) の手になる『ジュンヌ・ダメーの物語』(gzbur nu zla med kyi gnam rgyud) である。だが同作品はチベットにおいて伝統的に重んじられてきたインドの詩学理論書『詩鏡』(sryan rgyag me long) の修辭法に過度に依拠した作品であり、後述するチベットにおけるインド伝来の文学理論の支配である「ダンディン支配」の典型例ともいえるような作品であった。トンドゥ

プジャはこの作品を以下のように厳しく批判したという。

あれは釈尊伝などから昔のインド人の生涯を一つの軸にして、それをインド伝来の『詩鏡』の伝統に則った修辭法で拡張して作られたものだ。だからドンカルワ・ツェリン・ワンギューは『詩鏡』を熟知した達人でありこそすれ、偉大な作家であるとは思えない。[ヤブム 2012: 429]

同作品には英訳も存在するのだが、あまりにもインド的伝統に依拠しすぎているため、英訳本では多くの原文のチベット語の固有名詞をサンスクリット語に還元して表記せざるをえず、作品の舞台がインドなのかチベットなのかすら不明の、その意味ではインド文学のなぞりのような作品となってしまう<sup>⑩</sup>ている。その他、『六青年の物語』(gshun nu drug gi rtags bnyod) など、チベット古典文学史に名を残す物語の多くはインドの物語の翻案であり、そこに自由な創作という発想はほとんど見受けられなかった。二〇世紀前半に生まれ、僧院での伝統仏教学に飽きたらざインドやスリランカに遊学して近代学問を吸収したチベットの伝説の学僧であるゲンドウン・チュンペーが、インドで得た知識をチベット人たちに伝えるために記した『世界知識行黄金の平原』において述べた下記のような感懐はその意味

で興味深い。

我ら(チベット)の学者たちの思考様式、著作方法、服飾、宗教儀礼をはじめとする三門(身・口・意)のあらゆる営みには、胡麻粒に胡麻油が満ちているのと同じように、インドの影響で満ちている。<sup>⑪</sup> [dge 'dun chos 'phel 1990: 4]

このような学僧の感懐は、インド的伝統の支配が二〇世紀前半のチベットにおいてもいまだ強力なものであったことを伝えている<sup>⑫</sup>。しかもこの著作は、インド的伝統にどっぷりとひたっているくせに実際のインドを知らないチベット人たちに正しいインドの知識を伝えなければならぬ、という危機意識から執筆されたものである。このようにチベットにおけるインド的影響は甚大である。そうしたインド的伝統からある程度まで自由な、チベットにおいて物語性に富んだ文芸といえ、むしろ英雄叙事詩である『ケサル王物語』やチベット・オペラともいわれる歌舞劇アチェ・ラモなど、口頭で語られ演じられるような民間文学が主流であったともいえるだろう<sup>⑬</sup>。そこには自由な文体による自由な物語の創作という発想は乏しかったのである。



### 三 トンドウプジャとインダ的伝統

その意味においてチベット現代文学の成立はやはり新中国成立後の出来事であるといえる。チベット現代史の大きな画期となるのは新中国による「チベット解放」の年である一九五一年である。しかしこの時代区分を単純に文学史にも持ち込んで、たとえばチベット文芸評論家のミクマがいうように [mig dmar 2005]、一九五一年以前を伝統文学の時代、それ以降を現代文学の時代とすることは難しい。というのは、「解放」後のチベットはすぐさま反右派闘争や文化大革命の嵐に襲われたのだし、それは如何なる種類の文学にとっても幸福な時代とはいえなかったからだ。トンドウプジャも文革終了直後、民族教育が再開されるや、その第一期生として一九七八年に中央民族学院（現・中央民族大学）のチベット学の修士課程に入学した。その研究テーマは「敦煌出土チベット語古文獻に見られる詩歌の研究」であった。彼は主としてインド伝来のチベット詩学理論である『詩鏡』の研究や、敦煌文獻を活用した古代チベット史や古代チベット文学の研究に打ち込むと同時に、在学中から創作活動にも励んでいた。一九八一年に修士号を取得するとすぐさま同学院の教師に採用されて北京に残ってチベット学を講じ、一九八四年には故郷である青海

省の海南州民族師範学校の教師として赴任し、一九八五年の自死に至るまで旺盛な執筆活動を続けた。

こうしたキャリアが示すとおり、トンドウプジャは北京で教育を受けた新しい世代のチベット人であり、魯迅を講じ、老舍をチベット語に翻訳した文学者である。それゆえその教養には当然ながら中国的なものがあり、中国文学にも通じていた。だが同時に、トンドウプジャはチベットの伝統学問を高いレベルで修めた知識人でもあり、その素養には中国的なものと同時にインダ的なものがある。それゆえ、トンドウプジャの構想したチベット現代文学におけるインダ的伝統の存在についても我々は見逃してはならないのである。このチベットの伝統学問におけるインダ的要素とトンドウプジャの関係は微妙で緊張感に満ちたものであり、トンドウプジャは一方でそうしたインダ的伝統を十分に身につけた上で、他方それを如何にして克服するべきかという問題に苦悩していたのである。以下、この点について論じてみよう。

まず注目するべきは、修士論文に改訂をほどこして出版された『チベット道歌の生成発展の歴史と特質』（以下、『道歌源流』と略記）なる著作 [don grub rgyal 1997b] である。筆者はインド詩学理論や修辭学の用語が散りばめられたこの大部の著作を読みこなすだけの教養はないのだが、同書の主張の大枠は明快なものであるように思える。

一般に伝統チベット文学について語る際には、七百年に亘る「ダンディン支配」の問題がよく議論される。六世紀から七世紀にかけてのサンスクリット詩学理論家であるダンディンによる詩学理論の書である『詩鏡』が、一三世紀にチベット語に訳されてからというもの、チベットの古典文学は長らくこの『詩鏡』に支配されてきた。『詩鏡』を学習し、そのルールに則って詩作や作文を行うことが知識人にとつて必須の教養とされておき、伝統的には『詩鏡』を字ばねばチベット語で文章を綴ることすらできないとされていた<sup>16)</sup>。そして驚くべきことに、このような状況は新中国がチベットを統合した一九五〇年代においても存続していた。それどころか、「もしも『詩鏡』流の詩のみが詩であるというのなら、インドと〔それが伝わった〕チベットにしか詩が存在しないということになってしまう。そんな馬鹿げたことがあるのか」[don grub rgyal 1997b: 347]とトンドウプジャが主張しなければならなかったとおり、一九八〇年代においてもこのような状況は存続していたともいえるのだ。これが所謂「ダンディン支配」であるが、トンドウプジャは、敦煌出土チベット語古文獻に見られる古い詩歌や、あるいは宗教詩人ミラレパの詩歌などに見られる文学形式である「道歌」をして、『詩鏡』の「詩」とは区別されるものとして、そこにインドの伝統に毒されていない「チベット独自の詩歌」(bod rang gi snyan ngag)の伏流

を読み解き、隠されてきたもう一つのチベット文学史の可能性を見出ししている<sup>16)</sup>。『詩鏡』はチベット文学の重要な一部ではあるが、そこで展開される理論はあくまでも古代インドの現実に合わせて形成されたものであり、これをチベットに無批判に適用することは難しい[don grub rgyal 1997b: 344-345]。トンドウプジャが「それゆえ現在、我々の社会、我々の時代、我々の民族の特質を備えた新たな詩学の正典を新たに書くことは喫緊の課題なのだ」[don grub rgyal 1997b: 345]と訴え<sup>17)</sup>るをえなかつた所以である。

このようなトンドウプジャの構想はきわめて興味深い。というのはチベット現代文学の意義としてしばしば語られるのは、現代文学はチベット語による創作をダンディン支配から解放したのだ、という定式であるからだ。この定式そのものは正しいとして、その際、トンドウプジャをして単に平易なチベット語で小説を書いたというだけの素朴な言文一致の作家、あるいは反伝統の作家とみなす素朴な誤解が想定されうるからだ。確かに多くの国民文学において、伝統的な文語の桎梏から文学を解き放ち、言文一致の文体を確立した小説の登場を以て新文学の登場とする平板な理解があるが、トンドウプジャはこうしたケースに当てはまらないのである。彼の文学的試みは、むしろダンディン支配の影に隠されてきたもう一つのチベット文学史を再構築し、その延長線上に自らの文学を位置づけるというト

リッキーな試みであり、チベットの伝統文学を支配してきたインド的伝統を一方で否定しつつ、他方でよりチベット化したかたちで新たなチベット文語を形成しようとする試みともとれる<sup>6)</sup>。それは素朴な言文一致による口語文体とも伝統的な古典文語とも対立する、新チベット文語形成の試みであったように思える。彼が教壇に立つてチベット学を講じるようになってから、シユンシユンワ・チュウワン・タクバの翻案によるチベット語版『ラーマヤナ』とダライ・ラマ五世の手になる『チベット王臣記』をたびたびテキストとしてとりあげていたこと〔ペマブム 2012: 430〕、それを平易なしかし言文一致ではないチベット語に書きあらためる努力をしていたこと〔Lin 2008〕などのエピソードはその意味で示唆的である。というのもこの両書は、その流麗さで名高いと同時に、『詩鏡』をはじめとするインド伝来の修辞学のテクニクとりわけ徹底した同義異語表現を多用した煩瑣なチベット語の代表としても知られる、その意味でチベット文学におけるインド的伝統の典型ともいえるものであるからだ。単に伝統を受け入れるのでも、あるいは逆に批判して捨て去るのでもなく、インド的であったかあったことのないチベット伝統文学の歴史を十全に把握した上で、チベットのな伝統を新たに築きあげるといふ志をそこに感じることができようであろう。その意味でトンドゥブジャをして単なる伝統の破壊者とのみ見なすことは

正しい理解とはいえないように思える。

これはまたトンドゥブジャの執筆活動が展開された文革終了直後のチベットの思想的・文化的状況を背景に入れて考えるべきことであろう。よく知られていることだが、一九八〇年代初頭のチベットにおいては、文革中の締め付けが緩和されることで、社会の各部門において文革中に抑圧されていた伝統文化の復興が起こった。所謂一九八〇年代におけるチベット文化のルネッサンスの時代である。そして、そこには当然ながらインド伝来の『詩鏡』に基づくチベット伝来のチベット伝統文学の復興という動きも存在したのである。この時代に『詩鏡』の現代的翻案が相次いで出版され、チベット伝統詩学は、むしろ文革終了後のチベット文化復興のひとつのシンボルとして熱い注目を浴びることになった。トンドゥブジャの中央民族学院時代の指導教官でもあった碩学トウンカル・ロサン・ティンレーたちによる『詩鏡』の解説本は、伝統的に存在した従来の注釈本とは根本的に異なり、それまで一部の限られた知識人だけのものであった『詩鏡』のエッセンスを現代的な洋装本のかたちで、しかも学校教育における教科書として使用可能なように体系的に詳述したものである。そして、よく考えると当然のことではあるが、このようにインド伝来の文学理論が広くアクセス可能なものになったことは、チベット史上はじめてのことであった。学僧と一部と貴族知

識人の独占物であった伝統文学は、実はこの時期に初めて平民の俗人（とはいえそれはやはり一部の限られた知識人ではあるけれども）によっても学ばれるものになったとすらいえるのだ。その意味で、文学の部門における「改革開放」は、トンドゥプジャの試みたような現代的な小説創作という分野に先駆けて、まずは伝統文学の復活というかたちで行われていたのである。これはある種の皮肉であり逆説である。文革の抑圧からの解放とチベット文化のルネッサンスはむしろ伝統への回帰という現象を生み出し、例えばトンドゥプジャが乗り越えるべきと主張し桎梏としてとらえていた『詩鏡』は、却って若者たちによって熱意と敬意をもって学ばれるようなチベット伝統学問の象徴となり、また権威となつてしまったからだ。すなわち、文革の終了がもたらしたチベット文化のルネッサンスは、伝統文学の復活と現代文学の誕生という二つの相異なる潮流を同時に可能ならしめたものであったといえるだろう。別のいい方をすれば、文革の終了がもたらした自由とは、伝統を批判して革新的な文学を切り開くことの自由だけではなくて、伝統的な文学や宗教を賞賛することの自由をも意味していたのだ。このような観点からすれば、伝統文学に存在するインディ的伝統に対する批判者であったトンドゥプジャは時代の寵児であるどころか、時代の潮流に逆行する人物ですらあった。これはまたトンドゥプジャがチベット民族

主義者として賞賛される一方で、チベットの伝統の批判者として反感を買うというその評価の二面性とも関連しているだろう。<sup>18</sup>

トンドゥプジャとインディ的伝統との距離は、如上のとおり、きわめて微妙なものである。彼は一方においてチベットにおけるインディ的伝統を批判しつつも、そのようなインディ的伝統のもとに成立してきたチベットの伝統学問に対する深い敬意と自負を隠そうともしない。その意味で彼はむしろ過渡期の知識人と位置づけられるのである。その点において、彼が後続のチベット語作家たちと一線を画していることは指摘しておこう。筆者らチベット文学研究会が、トンドゥプジャの後に翻訳を刊行したペマ・ツェテン、タクブンジャ、ラシャムジャといった今日の作家たちにとつては、たとえチベット語で創作を行うにせよ、『詩鏡』とそれが体现するチベットにおけるインディ的伝統は、重要ではあつても高踏的な教養に過ぎず、文学を書く中で対決して乗り越えて行くべき対象とは認識されていない。<sup>19</sup> その意味ではトンドゥプジャは伝統と革新の相克において、その両者を理解できる過渡期の知識人であり、その作品もまた伝統と革新のはざままで苦悩し、その両者を橋渡しするような実験的なものと見なすことが正しいように思われる。

こうしたトンドゥプジャの実験的な姿勢は、特にその小説の文体や語り口に影響を与えていると思われる。その文

章は伝統詩学ほどに煩瑣で複雑なものではないとはいえず、凝ったものが多く、細かい修飾表現を連鎖させていくような文体は、確かに美しくはあるがときに修飾過多で、とりわけ日本語に訳してしまうとモダンな言文一致の小説に慣れ親しんだ我が国の読者にとつてはどこか違和感を覚えるようなところがあるかもしれない。とはいえ、これはトン・ドゥプジャの文章が難解なものであるということを意味しない。その文章は基礎的なチベット語の知識があればすらすらと読み通せるものであり、むしろ非常に凝った文体でありながらこれだけの可読性を確保した作家の技量に驚嘆させられるのである。こうした文体上の実験はあるいは目立たないものかもしれないが、こうした作家の努力こそは今日のチベット語の現代文学の隆盛を用意したものであろう。

#### 四 二つのチベット文学

以上の考察から、チベット語のチベット現代文学のある重要な意義が浮かび上がってくる。それは、インディックであったことのないチベット文化をインドから知的・文化的に独立させ、自立したチベットの伝統を構築するための土台作りという意義である。これを如上のタシ・ダワによる漢語チベット文学構築の思想的背景と比較すると、そこ

には歴然とした違いが存在する。タシ・ダワはチベットの過去における文学的伝統の不在を主張し、まさにその空白にこそ中国文学のなぞりではない新たなチベット文学創造の契機を見出そうとした。ここまで見てきたように、伝統文学の不在というこの認識はもしも歴史的な事実性にこだわるのであればあくまでも事実誤認であり、同時代人であったはずのトン・ドゥプジャの努力をまったく無視したものである。これでは「身内のチベット族からの反発」〔牧田 1991: 241〕を買うのも無理はないところである。だがこのようにネガティブな違いのみを強調するのもまた生産的とも言えない。両者の知的交流がきわめて乏しいものであったことは否めないとはいえ、チベットが少なくとも二つの言語による現代文学を持つていることは争えない事実であり、ここで我々が禁欲しなければならぬことはどちらが本当のチベット文学であるかといった不毛な問いを発することであろう。

むしろこのような錯綜した状況は、「××文学」といった表現が暗黙裡に一種の国民文学を前提としているという事実を前景化し、ことごと国家と文学の関係について考えるための絶好の素材を提供してくれていると考えることもできる。チベット文学について考えることは、このような「××文学」という名称が不可避的にはらむ分類の政治学について考えることでもある。台湾文学研究者の松永正義



は、漢語による台湾文学<sup>20</sup>が漢語により漢民族によって書かれていながらも中国文学とは呼びにくいことについて述べ、そのような分類は畢竟「民族的アイデンティティーのありかたをどうみるか、ということと関わる」〔松永2006:31〕と論じているが、これはチベット文学についても同様である。台湾と異なつてチベットは現在間違いなく政治的実態としても中国の一部ではあるけれども、その知的伝統を眺めてみたとき、チベットに存在するインディ的伝統の存在はあたかもチベットと中国の思想的距離の隔たりを象徴するものとしても存在するかのようだ<sup>21</sup>。山口守は漢語チベット文学を論じる中で言語の問題にも言及し、華文文学とは異なるものとしての漢語文学の概念とその可能性について論じている。山口は、一九八〇年代以降に唱えられるようになった華文文学が漢語による中国国外の文学をも包摂するという意味で、いっけん中国という国家の枠組みを超える視座を示しつつも、ふつう中国国内に住む少数民族の漢語文学を排除するかたちで、すなわち中国国内の多様性を捨象するかたちで成り立っていることを指摘し、そこに濃厚なナショナリズムの匂いが感じられることや中国の主体性を世界に押しだしていく文化戦略としての側面があることを指摘している〔山口2001〕。それに対して、むしろそうした中国文学の既存の枠組みや体系を揺り動かす

ような前衛的な試みであつて、このような文学をも含むような（その意味で華文文学とは区別される）漢語による文学という概念として漢語文学という表現を用いている〔山口2006:168-170〕。そのように考えてみると、チベット語チベット文学は、中国文学の枠内に位置しながらも必然的にそれをはみ出し、中国文学という概念の外延をあやふやなものに変えていくという機能を持ち、まさにこの機能において漢語チベット文学との距離は存外に近いとも言えるのである。チベット語の現代小説はインディ的ではなかったチベット伝統文学とも対立し、同時にまたそのような出自と何より漢語ではなくチベット語で書かれているという事実の故に中国現代文学とも対立する位置にある。それゆえ我々はこうした二重の対立という背景においてチベット語現代文学を理解することが可能となる。ところで上で確認したように、タシ・ダワは中国とチベットのそれぞれの伝統文学との対立を同時に避け、「想像された無伝統」とでも言いうる文学的空白を描定しつつ（それは言つてみれば事実誤認ではあったのだが）、その空白を活用して新文学を打ち立てようとしていた。その意味においてタシ・ダワにとつても二重の対立というテーゼは無関係なものではない。チベット語と漢語のチベット現代文学のあいだの対話の可能性の細い回路が存在するとしたらまさにこの点において他にないであろう。



ここで注目に値するのは、例えばペマ・ツエテンなどの漢語とチベット語の双方で執筆活動を行うバイリンガル作家である。現在のところ、こうした若い世代のチベット作家たちにとってトンドゥブジャが問題視したインダの伝統の桎梏はすでに重要な問題ではなく、彼ら彼女らはより簡素で平易なチベット語もしくは漢語を用いて創作を行う傾向が強い。とはいえ、漢語で書かれているからといってその文学がタシ・ダワやアーライのものと似ているという印象は薄い。むしろペマ・ツエテンの作品において特徴的なのは物語的な語り口と寓話性が強調されたある種の新しいスタイルである。<sup>(26)</sup>そこにはタシ・ダワの漢語作品がそうであるような前衛性はなく、またトンドゥブジャのチベット語作品がそうであるような文飾上の工夫もすで見られない。とはいえこのような作家が生まれて来たことの背景に、トンドゥブジャの時代にチベット文学が概念的にインダの伝統との対決を行い、チベット文学が概念的な自立をとげたジャンルとして認められたという経緯を見出すのは深読みではあるまい。そのような意味においても、チベット現代文学の黎明期におけるインダの伝統との闘いは重要な意義を持っていたのである。

本稿はチベット文学の創始者であったトンドゥブジャの一九八〇年代の創作活動を題材として、チベット現代文学とチベットにおけるインダの伝統の存在について論じてき

た。チベットに伝統的に存在してきたインダの文学の伝統はチベット語の現代文学を創作するにあたっての桎梏であり、こうしたインダの桎梏との闘いという意義は漢語チベット文学が共有し得ないものである。漢語チベット作家たちは基本的にチベットにおける伝統文学の存在を等閑視しており、それは大きな事実誤認ではある。しかしそうした誤認はまた同時にチベットにおける想像された無伝統を盾にとった前衛的な創作を作家たちに可能ならしめるものでもある。そうであるとしたら、中国文学の外延を相対化するという機能において、漢語チベット文学とチベット語チベット文学の間に一種の共通点を見出すことが可能である。もちろんこうした総括は、両文学の間に本質的に存在する読者人口や知名度の圧倒的な差を思えばやや樂觀的なものかもしれない。それでもチベット文学が二つの言語を持つていることの意味を肯定的にとらえていくためには本稿のような作業はどうしても必要であったと考えている。我々はかつての漢語チベット作家たちが無邪気に想定したようにチベット文学の過去に伝統の空白を想定することはできない。とはいえインダの伝統の存在を以て漢語チベット文学とチベット語チベット文学の差異と懸隔を必要以上に強調し、共有不可能なものとしてしまう立場にも与することはできない。むしろ、今後必要とされていることは、その両者の関係をより多角的に検討していく作業

であり、本稿はきわめて初歩的なその前段階としての準備の試みであった。

## 注

- 〈1〉中国文学の文脈内におけるこうした漢語チベット文学への高い評価としては、例えば牧田英二〔1991〕やパトリシア・スキヤフィニ＝ヴェダーニ〔Schiaffini-Vedani 2002, 2007〕、さらには山口守〔山口 2006, 2012〕の諸論考がある。
- 〈2〉タシ・ダワやアーライの作品の邦訳は中国文学関係の雑誌に掲載されている他、単行本として入手容易なものとして「ザシダワ色波〔1991〕阿来〔2004, 2012〕」などがある。これらの訳書に附された解説は漢語チベット文学の優れた入門ともなっている。
- 〈3〉例えば二〇〇七年と二〇〇八年に相次いで主としてチベット語文学を対象とした良質の論文集が英語で上梓されるなど〔Venturino ed. 2007; Hartley and Schiaffini-Vedani eds. 2008〕、欧米チベット研究のなかでチベット現代文学は確固としたジャンルとして一定の存在感を持っている。
- 〈4〉例外といえるのは人民解放軍とともに一九五〇年代にラサ入りしたチベット通の耿予芳の訳業である。彼は漢族のチベット語チベット文学研究者としては第一人者であり、一九八〇年代におけるチベット語文学の登場と展開を

ほぼ同時代にフォローしてその作品のいくつかを漢語に訳しており、また多くのチベット文学の概説書を執筆している。そうした翻訳や評論は彼の著作集〔耿 2000〕に収録されている。

〈5〉たとえば龍仁青はトンドゥブジャの短編八本の漢語訳を収録した単行本〔端智嘉 2008〕を出版し、また自身漢語とチベット語の両言語で創作するバイリンガル作家にして映画監督であるペマ・ツェテンは盟友のチベット語作家タクブンジャの作品を精力的に漢語訳して文芸誌に公表している。

〈6〉単行本のかたちで出版されたものとしてトンドゥブジャ〔2012〕、ペマ・ツェテン〔2013〕、ラシャムジャ〔2015〕、タクブンジャ〔2015〕がある。なおペマ・ツェテンは漢語とチベット語のバイリンガル作家であり、邦訳には漢語作品とチベット語作品の双方を取めた。またラシャムジャのものは長編であるが、その他の三冊はいずれも短編および中編小説を選んで編訳したものである。また煩瑣になるので詳述しないが、筆者らは、惜しまれつつ廃刊となった中国文学文芸誌『火鍋子』に二〇〇八年より毎号、チベット文学の邦訳を掲載してきた他、チベットの現代映画と文学についての雑誌『Sernyal』においてもチベット文学の邦訳を発表している〔チベット文学研究会編 2013, 2015〕。

〈7〉このような状況は、レイ・チョウが「アジア研究」における古典文学と近代文学との対立として中国文学を事例

に描いた状況と共通するものだろう。チョウはアメリカのアジア研究の文脈においては「近代文学だけを研究したものは、一種の文盲」とみなされ、またこういった古典重視の土着的エリート主義を信奉する欧米研究者はネイティブの学者と同じくらい、あるいはそれ以上に多くいると指摘する。つまり、「近代アジア文学は、専門家以外には知られていないばかりか、アジア文化の専門家にさえ軽視されてくる」のだ〔チョウ 1998: 202-204〕。

〈8〉ソナムの主張は索朗〔1987〕に詳しい。また同じくチベット人文学研究者であるチュータクもこのソナムの主張をほぼ踏襲した論考を発表するなど〔chos grags 1989〕。一九八〇年代においてはチベット語の重要性を強調する言説は勢いを持っていた。また中国の指導的なチベット学者の沈衛荣は、漢人たちのチベット人に対するインナー・オリエンタリズムを批判する論考の中で、チベット人の風俗習慣を猟奇的なものとして描いた馬建の『お前の舌を出せ、さもなくば空々漢々だ』（亮出你的舌苔或空空荡荡）という漢語小説とそれがチベット人の間で引き起こした反発について述べている。同書は文革終了後の中国における初の発禁書となったが、これも一九八七年の事件である〔沈 2013〕。この時代の雰囲気伝えるエピソードであるといえるだろう。

〈9〉そうしたチベット語知識人からの「身内の批判」を受けやすい漢語作家は昔ならばタシ・ダワ、今日ではアーライである。こうした見方はかなり硬直した二項対立的な

ものであり、例えばアーライの『塵埃落定』を大政翼賛的な文学であるとして批判する海外チベット人の声に対して、同作品の精読から実際にはよりニュアンスに富んだ解釈が可能であることを示した論考に Brunovich〔2010〕がある。ことは漢語チベット文学に留まらない。チベット語文学の創始者であるトンドゥブジャですら時としてこうした身内からの批判にさらされることは多い。トンドゥブジャは解放後の新中国の体制内で教育を受け、その枠内で文学した作家であり、その作品は現代チベットをリアリズムで描いたものである。それゆえ、当然のことであるが、その作品内でチベットが中国統治下にあることは所与の前提となっている。だがこのことが、特にインドなど国外の亡命チベット知識人たちの反発を招くことがある。こうした批判の例として Pema Tsering〔1999〕など。

〈10〉トンドゥブジャの生涯やそのキャリアの詳細については既発表の筆者の論考を参照のこと。

〈11〉こうした文学ジャンルに対するチベット学者スタンの以下の発言はその意味で興味深い。「たしかに、それはチベットの学者たちを喜ばすものではあつたが、しかしチベット固有のものを持つておらず、インド風文体の学習にすぎない」〔スタン 1993: 334〕。

〈12〉ゲンドウン・チュンペーの生涯およびそのチベット現代史上の意義については星・大川〔2012〕を参照。

〈13〉アチェ・ラモについては三宅伸一郎らが詳しい解説とともにその劇本を邦訳している〔三宅・石山 2008〕。

〈14〉とはいえ、チベット現代文学にとつての一九五〇年代の重要性を無視するわけではない。この時期の中国は、チベットにおける旧制度の存続を許容しつつ穏健な改革による包摂を目指したものであり、この時期に伝統知識人であった学僧たちは共産党との協力のもと、現代的な観点からチベット修辭学や文法学のテキストを作成しており、それらの業績は文革終了後のチベット文学の隆盛に期するところが大きかった [Hartley 2002, 2007, 2008]。

〈15〉チベット語におけるインド伝統修辭学の支配（いわゆる「ダンディン支配」）についてはレオナルド・ファンデルカイプの紹介 [van der Kuip 1996] を、またチベット語に翻案された『ラーマーヤナ』を題材にしてこうした「ダンディン支配」に抗しようとしたトンドゥプジャの試みについてはナンシー・リンの業績 [Lin 2008] を参照のこと。

〈16〉またトンドゥプジャは民間歌謡や恋愛歌である山歌 (la gchas) などもチベット独自の文学の重要な構成要素でありこれを無視することはできないとしている [don grub rgyal 1997b: 350]。

〈17〉トンドゥプジャは『詩鏡』の伝統を正面切って批判しているわけではないが、それでも「みな『詩鏡』の原則に合わせようとするために、数百年に亘ってチベットの詩歌と道歌の発展の速度はゆっくりとしたものとなり、また質的にも高い水準にいたることができなかった」 [don grub rgyal 1997b: 350] という発言からも、『詩鏡』をしてチベット文学に課せられた桎梏と見なしていることは明らかである。

かである。

〈18〉問題作「化身」のためにトンドゥプジャが受けた批判、さらには彼が受けた批判と平民の俗人であるという彼の出自とが関係している可能性については Kapstein [2002] が論じている。

〈19〉こうした後続チベット語作家たちの文体の平易さについては大川 [2012] や海老原・星 [2014] も言及している。

〈20〉漢語による、という但し書きをつけたのは、台湾文学のカテゴリの中には日本語による文学なども存在し、チベット文学同様に言語的多様性を無視できないからだ。

〈21〉事実、チベット問題をめぐる議論においては、チベットにおけるインドの伝統の存在を盾にして中国との差異を強調するアイデンティティ・ポリティクスが頻繁に観察される [大川 2013]。

〈22〉興味深いのは、この作家の漢語作品において言語的なデイスコミュニケーションがしばしばテーマとして取り上げられていることである。アメリカ人旅行者とチベットの牧童の交流を描いた「八匹の羊」(ペマ・ツェテン [2013] に所収) もその例だが、とりわけ興味深いのは「黄昏のパルコル」(ペマ・ツェテン 2015) である。ここではチベット語を解さない漢人旅行者と、つたないながらも漢語を話すチベット人少年、さらには漢語を解さないチベット人少女という三人の会話のやりとりが描かれているが、唯一のバイリンガルである少年が、まさに言語的なデイスコミュニケーションを逆手にとって状況を自らの思う方向へと進

めていく様が巧みに描写されている。このような少年の立ち位置は、漢語とチベット語の双方で創作するという新たなスタンスを確立しつつある作者の立ち位置をも示すものであり、漢語で書かれていながらも常に背景に多言語の響きを感じ取ることができるという点に大きな特徴がある。

## 参考文献

〈日本語〉

- 阿来 2004 『塵埃落定——土司制度の終焉』 西海枝裕美・西海枝美和訳、近代文芸社（阿来 1998 『塵埃落定』 北京・人民文学出版社）
- 阿来 2012 『空山——風と火のチベット』 山口守編訳、勉誠出版（阿来 2005 『空山』 巻1・巻2、北京・人民文学出版社）
- 海老原志保・星泉 2014 「小説家の描く現代チベット——アムド出身の二人の作家」 『日本チベット学会会報』 第六〇巻、一三五—一六〇頁
- 大川謙作 2008 「トンドゥプジャ『化身』とその周辺」 『火鍋子』 第七一号、一三七—一四五頁
- 大川謙作 2010 「欺瞞と外部性——チベット現代作家トンドゥプジャの精読から」 小長谷有紀・川口幸大・長沼さやか共編『中国における社会主義的近代化——宗教・消費・エスニシティ』 勉誠出版、二四七—二七五頁
- 大川謙作 2012 「訳者解説——トンドゥプジャとチベット

現代文学」トンドゥプジャ著、チベット文学研究会編訳『ここにも激しく躍動する生きた心臓がある——チベット現代文学の曙』 勉誠出版、三八六—四一三頁

大川謙作 2013 「チベット仏教と現代中国——包摂と排除の語り」 川口幸大・瀬川昌久編『現代中国の宗教——信仰と社会をめぐる民族誌』 昭和堂、二四七—二七七頁

大東和重 2013 「東アジア——それぞれの文学の経験」 『日本近代文学』 第八九集、二二—二三五頁

ザシダワ、色波 1991 『風馬の耀き——新しいチベット文学』 牧田英二編訳、JICC出版局

R・A・スタン 1993 『チベットの文化 決定版』 山口瑞鳳・定方晟訳、岩波書店（R. A. Stein, 1987, *La Civilization*

*Tibétaine, édition définitive*, Paris: L'Asiatique）

タクブンジャ 2015 『ハバ犬を育てる話』 チベット文学研究会編訳、東京外国語大学出版社

チベット文学研究会編 2013 『SERNYA チベット文学と映画制作の現在』 vol.1、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所

チベット文学研究会編 2015 『SERNYA チベット文学と映画制作の現在』 vol.2、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所

レイ・チョウ 1998 『ディアスポラの知識人』、本橋哲也訳、青土社（Ray Chow 1993 *Writing Diaspora: Tactics of Intervention in Contemporary Cultural Studies*, Indiana University Press）

トンドゥプジャ 2012 『ここにも激しく躍動する生きた心

臓がある——チベット現代文学の曙』チベット文学研究会  
編訳、勉誠出版

ペマ・ツェテン 2013 『ティメー・クンデンを探して——  
チベット文学の現在』星泉・大川謙作編訳、勉誠出版

ペマ・ツェテン 2015 「黄昏のパルコル」大川謙作訳、チ  
ベット文学研究会編『セルニャ』vol.2、七六—八六頁（万  
瑪才旦「黄昏、帕廓街」「死亡的顔色」一二七—一三八頁）  
ペマム 2012 「トンドゥプジャの生涯 流星——夜空を光  
のごとく駆け抜けて消えた男」星泉訳、トンドゥプジャ著

『ここにも激しく躍動する生きた心臓がある——チベット  
現代文学の曙』勉誠出版、四一—四四〇頁

星泉・大川謙作共編 2012 『ゲンドウンチュンペー伝——  
チベットの伝説の学僧の生と死』東京外国語大学アジア・  
アフリカ言語文化研究所

松永正義 2006 「台湾文学の歴史と個性」『台湾文学のおも  
しさを』研文出版、二九—七〇頁

牧田英二 1991 「解説」牧田英二編訳『風馬の耀き——新  
しいチベット文学』JICC出版局、二二七—二五二頁  
三宅伸一郎・石山奈津子共編 2008 『天翔ける祈りの舞  
——チベット歌舞劇アチュ・ラモ三話』三宅伸一郎・石山  
奈津子編訳、臨川書店

山口守 1999 「越境する文学と言語——中国文学・台湾文  
学・日本文学」『日本台湾学会会報』第一号、二五—三〇  
頁

山口守 2001 「華文文学という名の妖怪が世界を徘徊して

いる」『ユリイカ』第三三卷第一号、二五六—二五七頁

山口守 2006 「夜の対話からマイナー文学まで——史鉄  
生、ザシダワ、アールライ」尾崎文昭編『規範からの離脱  
——中国同時代作家たちの探求』山川出版社

山口守 2012 「解説」阿来著、山口守編訳『空山——風と  
火のチベット』勉誠出版、三八七—四一三頁  
ラシヤムジャ 2015 『雪を待つ——チベット文学の新生  
代』星泉訳、勉誠出版（Lha byam rgyal, bod kyi bes phrug, 北  
京：民族出版社）

〈チベット語〉（チベット語のみ読者の便のために邦語大意を  
添えた）

chos grags 1989 “Bod kyi rtsom rig gi tshad gzhi brjod pa,” *Bod  
kyong zhib 'jug*, 1989 (2), pp. 95–108 (チュータク「チベット文  
学の基準について」『チベット研究』一九八九年第二期所  
収)

dge 'dan chos 'phel 1990 *rgyal khann rig pa skor ba'i gnam rgyud  
ger gyi zhang ma zhes bya ba bzang sa, stod cha, hor khang bsod  
nams dpal 'bar ed. dge 'dan chos 'phel gyi gsung rtsom, deb dang  
po*, 拉薩：西藏藏文古籍出版社（ゲンドウン・チュンペー  
『世界知識行——黄金の平原』上、ホルカン・ソナムペン  
パー編『ゲンドウン・チュンペー著作集』第一巻）

don grub rgyal 1997a “Bod kyi tshig rgyan rig pa'i sgo 'byed  
'phul gyi lde mig bkags pai myong tshor,” *don grub rgyal, dpal  
don grub rgyal kyi gsung bun*, 北京：民族出版社、一五二—一  
六二頁（トンドゥプジャ『チベット修辭学の扉を開く魔



法の鍵』を読んべの感想』『トンドゥブジャ著作集』第三卷所収)

don grub rgyal 1997b “bod kyi mgru glu byung ‘phel gyi lo rgyus dang khyad chos bsdu par ston pa rig pa'i khye'u mam par rten pa'i skyed tshal zhes bya ba bzhus so,” don grub rgyal, *dpal don grub rgyal kyi gsung bum*, 北京: 民族出版社, 三二六—六〇一頁 (トンドゥブジャ「チベット道歌の生成発展の歴史と特質」『トンドゥブジャ著作集』第三卷所収)

mig dmar 2005 “bod kyi deng rtsom gyi dus mtams skor gyi ‘char sgo,” bod ljong slob grwa chen mo'i rig deb 2005-1: pp. 64-67 (ミクペ「チベット現代文学の時代区分について」『チベット大学学報』二〇〇五年第一期所収)

〈中国語〉

沈衛荣 2013 「説跨文化誤読」『妖魔化與神話化西藏的背後』台北: 人間出版社, 八五—一二四頁

端智嘉 2008 『端智嘉經典小說選訳』龍仁青訳, 西寧: 青海民族出版社

耿子方 2000 『雪域文苑筆耕録』上・下, 北京: 民族出版社

索朗 1987 「文学的民族特色与藏族文学」『拉薩藏学討論會文選』拉薩: 西藏人民出版社, 一三八—一五六頁

〈英語〉

Baranovitch, Nimrod 2010 “Literary Liberation of the Tibetan Past: The Alternative Voice in Alai’s *Red Poppies*,” *Modern China*, Vol. 36, No. 2, pp. 170–209.

Kapstein, Matthew T. 2002 “The Tulku’s Miserable Lot: Critical Voices from Eastern Tibet,” *Amal Tibetans in Transition: Society and Culture in Post-Mao Era*, ed. by Toni Huber, Leiden: Brill, pp. 99–111.

van der Kuji, Leonard 1996 “Tibetan Belles-Lettres: The Influence of Dandin and Ksemendra,” *Tibetan Literature: Studies in Genre*, ed. by José Ignacio Cabezon and Roger R. Jackson, Ithaca: Snow Lion Publications, pp. 393–410.

Lin, Nancy 2008 “Dondrup Gyel and the Remaking of the Tibetan Ramayana,” *Tibetan Modern Literature and Social Change*, ed. by Lauran R. Hartley and Patricia Schaffini-Vedani, Durham: Duke University Press, pp. 86–111.

Hartley, Lauran R. 2002 *Contextually Speaking: Tibetan Literature Discourse and Social Change in the PRC (1980–200)*. Ph. D. Dissertation, Indiana University.

Hartley, Lauran R. 2007 “Ascendancy of the Term rom-rig in Tibetan Literary Discourse,” *Contemporary Tibetan Literary Studies*, ed. by Steven J. Venturino, Leiden: Brill, pp. 7–21.

Hartley, Lauran R. 2008 “Heterodox View and the New Orthodox Poems: Tibetan Writers in the Early and Mid-Twentieth Century,” *Tibetan Modern Literature and Social Change*, ed. by Lauran R. Hartley and Patricia Schaffini-Vedani, Durham: Duke University Press, pp. 3–31.

Hartley, Lauran R. and Patricia Schaffini-Vedani eds. 2008 *Tibetan Modern Literature and Social Change*. Durham: Duke

- University Press.
- Maconi, Lara 2008 "One Nation, Two Discourses: Tibetan New Era Literature and the Language Debate," *Tibetan Modern Literature and Social Change*, ed. by Lauran R. Hartley and Patricia Schiaffini-Vedani, Durham: Duke University Press, pp. 173-201.
- Pema Tsering 1999 "A Deceitfully Erected Stone Pillar and the Beginnings of Modern Tibetan Literature," *Tibet Journal*, Vol. 24, No. 1, pp. 112-124.
- Schiaffini-Vedani, Patricia 2002 *Tashi Dawa: Magical Realism and Contested Identity in Modern Tibet*, Ph.D. Dissertation, University of Pennsylvania.
- Schiaffini-Vedani, Patricia 2007 "Changing Identities: The Creation of Tibetan Literary Voices in the PRC," *Contemporary Tibetan Literary Studies*, ed. by Steven J. Venturino, Leiden: Brill, pp. 111-131.
- Venturino, Steven J. ed. 2007 *Contemporary Tibetan Literary Studies*, Leiden: Brill.